オリンピックスポーツ文化研究
2017. 3　No. 2　129 ― 135

研究報告
（研究プロジェクト）

メダリストへの軌跡
―相原俊子　選手―

波多腰　克　晃（スポーツ哲学研究室）
大河原　裕　迪（スポーツ文化学群）

本稿は，「研究プロジェクト：日体大とオリンピックの関わり」の一環として実施した，メダリストへのインタビューをもとに構成されている．

本インタビューは平成 28 年 12 月 14 日（水）に相原俊子氏にお話を伺った．

【経歴】

相原俊子（あいはら　としこ　旧姓：白須）
1939 年 6 月 3 日（生）～
出身：広島県三原市
競技：体操競技

1955 年～1958 年　広島県三原高等学校
1958 年～1962 年　日本体育大学 体育学部 体育学科
ローマオリンピック大会出場
プラハ世界選手権大会出場
1963 年 3 月　相原信行選手と結婚　東京
1964 年 10 月　東京オリンピック大会出場
1964 年 11 月　洗足学園第一高等学校　着任
1967 年～1968 年　スポーツ大使としてベネズエラへ派遣される　体操の指導・普及活動
1973 年 3 月　相原スポーツ店 開店
1977 年 4 月　自宅敷地内に体育館　起工
1979 年 6 月　相原体操クラブ 開講　高崎市内
1986 年 9 月　自宅敷地内に体育館　設立

【競技歴】

1960 年　ローマオリンピック大会：団体／ 4 位，個人／ 24 位
1962 年　プラハ世界選手権大会：団体／ 3 位，個人／ 10 位，床／ 6 位
1964 年　東京オリンピック大会：団体／銅メダル，個／ 7 位，段違い平行棒・跳馬／ 4 位

1．競技との出会い

1960年ローマオリンピック大会にはじまる体操競技男子オリンピック5大会連続，世界選手権5大会連続団体総合金メダルとともに，女子もまたローマオリンピック大会団体4位，プラハ世界選手権大会団体3位，そして東京オリンピック大会団体銅メダルを獲得するなど，いわゆる“体操ニッポン”の礎を築いた時代の相原俊子（以下；俊子と表記）氏ついて報告する．

“体操ニッポン”に示される日本の体操競技の活躍は主に，男子の団体金メダル獲得に注目される．しかし，女子もまたローマオリンピック大会団体4位，プラハ世界選手権大会団体3位，そして東京オリンピック大会団体銅メダルするなど世界に誇る活躍を示していた．その団体のメンバーとして活躍した俊子氏の競技との出会いについて確認する．大方予想されるは，幼少の頃から体操に明け暮れていたということではないだろうか．しかしながら俊子氏の場合，トップの体操競技選手としては異例の競技との出会いをしていると言えるかもしれない．幼少の頃は主に7つ上の兄との遊びを通して体の動きを学んでいったという．

> 兄は近所のガキ大将だったものですから，すぐ裏に米田山っていうのがあるんですが，その山，ひと山が遊び場だったんですね．だから，今の子たちのように体育館へ来て練習をするといったことではなくって，野山を走り回るっていうことでしたね．1メーター80くらいの側溝を兄たちはぽんぽんぽんぽん飛び越えていたんですね．

小学校5年の時，「市内の高跳びの大会があるからおまえやってみろ」と先生に言われて，5年生から高跳びを経験する．

> もともとゴム飛びが好きだったものですから，ゴム飛びをやっていたらその格好を見て「やってみろ」となったみたい．それで，中学に行っても，ハイジャンと幅跳びをやっていたんですね．また，私はまだ小学校の何年生かなあ，2年生か3年生くらいで，お兄さんたちがやることは全部できると思っていた．兄は，1951年第6回福岡国体の卓球で優勝しています．そんな兄から2年間くらい卓球の指導を受けてダブルスを組もうって言われましたが，あまりに私が小さくって，卓球台に上がっちゃ駄目なんですよね．体が触れたら駄目なんですね．上がらないとショートが取れないんですよ．それで兄が諦めて体操に目が向いたっていう感じでしょうかね．

そして，県大会で常に優勝している伝統校の三原第二中学校で体操にであう．平均台を歩く体育の授業のときに，体育教師が「体操部があるんだけどもやってみないか」と言われ，体操にのめり込んでいくことになった．

> 先輩たちに一生懸命，追い付け追い越せっていう感じでいきまして，1年生のときに個人総合で3位，跳馬で，あの跳び箱ですね，あれで優勝し，それがきっかけで陸上ではなく，体操にどんどんのめり込んでいきました．

高校進学は体操競技の名門三原高等学校に進学．当時メルボルンオリンピック大会に出場していた池田敬子選手をみて，また三原高校の先輩の技術を目の当たりにし，そうした先輩方は日体大へ進学する選手が多かったので，俊子氏もまた自然と日体大への進学を志していった．ただし，より体操競技の道を歩むことになった決定的な出来事は，高校3年生のときの秋田の大会である．規程演技で2位という結果に終わる．

> これまで落ちたことのない平均台の自由演技で落ちましてね，4位になったんです．そのときに同級生が，普通だったら4位で残念だったねって言われるはずですよね．それを，私は多分そう言うだろうと思ってたいら，「白須（旧姓；括弧内

筆者）さん，あの，4位でおめでとう」って言われたんですね. なんで, おめでとうなんだって思ったの．そしたら,「あんたが優勝か3位までに入ったら，多分高校で体操はやめたろう．でも，あんた4位になったんだからこれからだよな」って，そう言ってくれたんです．ああ，そうか，そういう考え方もあるんだって思って，それで火が付きまして，どうしても日体へ行きたいっていう気持ちになりました．その同級生のその一言っていうのは，私にもう一回体操を考えさせてくれた一言ですね.

当然のことながら，高校の恩師であり，日体大の卒業生でもある中島リキコ先生を師事していたということも日体大進学を決めたきっかけとなっていった.

2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

日体大入学後，当時すでに活躍していたコーチであり，後に夫となる相原信行（以下；夫信行と表記)氏の前向きな姿に感銘を受け師事して学ぶ. ローマ大会に出場できたのは，3年生のときに相原先生（夫信行氏）に難易度の高い技を教えてもらったことと，代表に選ばれたいという欲よりも目の前の演技に集中することできたことが大きく影響していたという.

大学4年間は練習に明け暮れる毎日だった．1，2年生の頃は寮生活をしていた．しかし，入学直後にけが（右足アキレス腱断裂）によって3週間の入院を余儀なくされる．その間，授業のノートを病室まで持ってきてくれた女子バレーボール部の友人に支えてもらったことが今でも思い出としてよみがえる．3，4年生は深沢坂上にあった下宿で生活をするが，偶然にも池田選手が下宿していた後の部屋だった.

1年生の時，けがによって試合に出場できないことや1958年に東京で開催されたアジア競技大会において日体大生が東京国立競技場で『春の海』とともに演舞をすることになったが，自分は松葉杖をつきながらその様子をみているだけで楽しみにしていた演舞の参加が叶わなかったこと，また体操競技の練習もできずにいたため，そのときに“ただでは（広島に）帰れない，帰らない”という強い思いが俊子氏を成長させていった．2年次には虫垂炎に罹り，外科手術が必要になった．通常は横に切るため, 手術後は腹部が凹んでしまう. そうすると，平行棒の競技に影響が出る可能性があった．医師にはできる限り競技に支障が出ないように相談をし，術式を変更してもらった結果, 競技復帰後，十字に切ることによって腹筋の筋肉を維持することができた．我々はトップアスリートの勝利に対する直向きな姿をここに垣間見ることができるはずである.

3. 東京オリンピックのメダル獲得

東京オリンピック大会のメダル獲得に至る経緯には，俊子氏のその後の人生に対する考え方，そして，日本の学校教育やマスコミに対する想いにも示されている内容をここで確認することができる.

主人が東京オリンピック大会の最終予選で8位だったものですから，主人はメンバーに入れませんでした．東京オリンピック大会のときは7位の人は補欠だったんですね．彼は8位でしたから，自宅アパートで留守番っていう形を取りましてね．それもちょっと切ないものがありました．東京オリンピック大会の最終予選が終わりましたときに，私は池田敬子先生に続いて2位で，選考内にいたんですけども，主人が8位っていうのがその時点で決まりましてね．それで，私は主人と一緒に東京オリンピック大会に臨むっていう，それが一番の気持ちだったんです．ローマオリンピック大会も私は行きましたけど旧姓でしたし，東京オリンピック大会のときには2人そろって行けるって思っていたんですけども，そのときに，最

終予選が終わりまして部屋へ帰りましたときに，「おまえはこれから2か月これを頑張ってごらん」と主人がもう10月までに私がやらなきゃいけない課題をちゃんとメモってくれておりましてね，非常に冷静でした．本当に私のほうがショックを受けて，もう東京大会はいいって思ったぐらいですから．一緒に出るためのその1年っていうのは，朝は6時前から，走り込みをやっていましたしね．そういった，努力は本当に悔いがないくらいやった2人でしたのでね，どうしても一緒に出たかったんです．それが出られないっていうことが分かったときには，私のほうが落ち込みました．

そうした心境にいたとき，最終予選の翌日の新聞に，

今でも忘れられないんですけども，明暗相分かつっていって，小野さんご夫婦が，タカコちゃんをこう差し上げている．その横で私が池田先生の膝に泣き伏している．その写真を新聞紙面に出したんですよ．なんということをしてくれるかと思いました．それで私はもう新聞，雑誌，活字は一切見ない．東京オリンピック大会が終わるまで一切見ないっていう，そんな決心をしました．記者の人はどういう気持ちでそんな記事を出してくれたか分かりませんけども，私にとってはね，本当に，屈辱でした．同じような努力をしてきた人間2人をね，そういうような見方してくれたのかって思うとね，もう本当に嫌で，だから雑誌も，それから新聞も，一切自分の目には置かないようにしました．何が書いてあったか，何がどうしたか，その後の記事なんか知りません．

それまでマスコミに対して，特別な感情はなかったし，取材を受ければ応えることもあったというが，その後は取材を避けるようになっていく．

取材はできるだけ，受けないようにチームリーダーの荒川先生にお願いをしたり，それから，若い新聞記者なんかは顔と名前が一致しないんですね．だから，私に「相原俊子選手はどこにいますか」って言われて，「あ，あそこ，ほら，歩いている選手がそうじゃないですか」って言って知らん顔をしました．

4. その後の人生

俊子氏は，日本のマスコミは金メダリストに対して特に敬意を払う傾向にあるが，銅メダリストに対しては軽視しているように感じられるという．「時々今でもあるんですけどね．全部プロフィールまで言わなきゃいけない．あなた取材に来たのにね，生年月日と出身校くらいは覚えてきてくださいよって言いたくなる」ような，マスコミの対応に対して現役を引退した後もさらに疑問を抱くようになっていった．

最近では多くのオリンピック選手がテレビ出演をしているが，ローマオリンピック大会，そして東京オリンピック大会時のブランデージIOC会長の徹底したアマチュアリズムを思い出すという．それ故，当時の選手たちもアマチュアの精神を貫いていた．そのような選手時代を過ごしたこともあり，近年ではテレビ出演や講演に伴う金銭授受に対して行き過ぎているように感じているようだ．なぜなら，アスリートは名前を売ることが大切なのではなく，そこに至る過程が大切なのだから，自分自身のプロセスを見てもらいたいと願うアスリートになってほしいという視点にたつ．そこには選手も世論も大会の結果に至るプロセスに注目するような風潮をつくるべきではないだろうかという願いが感じられる．

だからこそ，今なお「私たちはブランデージ会長の下で過ごした選手ですから，最後までアマチュアでいたい」という精神を貫いているという．

たとえば，何十万円で講演を受けるということをはっきり言うアスリートの人がいるように聞いているが，

私はこちらの群馬へ帰ってから，確かに，小学校とか中学校とか公民館とか回らせてもらいましたけども，自分のほうから一切，その，金額に関しては言いませんでした．だから3000円のときもあるし，5000円のときもあるし，その予算の中で常に今の今までやらせてもらっています．本当に必要最小限のお金はありがたくいただきますが，でもアスリートっていうのはやっぱり自分のそのプロセスを見てくださいって言える人間であってほしい．

という．

俊子氏は東京オリンピック大会後，洗足学園第一高等学校に着任する．2年間東京の生活を送るが，その後夫信行氏が外務省の招聘を受け，それに帯同し，指導者としてベネズエラで1年間を過ごす．1963年に夫信行氏が体操大使として南米5か国を歴訪している時にコーチとして再度きてもらいたいとの要請をうけたことがきっかけとなった．当時は，物価の高いベネズエラの生活は苦しく，首都カラカス在住中は教え子の母親のマンションの一室を借りて，信行氏，俊子氏，1歳4か月の長女の3人のベネズエラ生活が始まった．そして，生活苦のなか，多数の建物被害を受けたカラカス地震に遭う．ちょうど近くのラ・グアイラ海岸へ外出していたため，直接の被害を受けることはなかったが，滞在先のマンションの煉瓦が落ち，壁に大きなひびが入る被害を受ける．

このように苦しい生活や被害に遭いながらも，現地で得た経験がその後の人生に影響を及ぼす．当時1か月ほど，首都カラカスを離れてメリダという街で指導を行っていた．そこで出会ったヘーゲル氏に強く触発される．ヘーゲル氏は体操競技選手としての実績があるわけではなかったが，1日に3つの仕事を抱えつつ，3時になると子どもたちを集めて体操場まで送り，夕方6時になると迎えに来るというボランティア活動をしていた人物である．そのボランティア精神を目の当たりにし，帰国後，自宅敷地内に体操場を設立する青写真をこのときから徐々に描いていったという．まさに帰国後，夫信行氏は一時，大学教員とスポーツショップ経営，そして実家家業の砂利採取業をこなすことになったが，そうした苦しい時期を乗り越えるバイタリティの源となった，ヘーゲル氏の存在を抜きにして二人の人生は語れないであろう．このような激動の人生をともに歩んだ夫信行氏が58歳のときに脳梗塞で倒れ，亡くなる2013年（平成25年）7月16日（78才）まで，夫信行氏を支えながら歩んできた．そして，その想いは次男豊氏に受け継がれ，俊子氏は今なお次男豊氏とともに自宅の体育館にて後進の指導に力を注いでいる．

5. 日体大生に一言

これまでに述べてきたように，俊子氏の想いや願いにはアスリートに敬意を払うことの大切さを感じさせられる．そうであるからこそ，日体大生に伝えるべきこともまた，アスリートに対する敬意を払うことの大切が示されている．

以前，内村選手の激励会に出席した際，日体大の座席にいても，どこかのおじちゃんとおばちゃんなんです．学生知らないの．それで，具志堅さんや監物さんがあいさつに来て，初めて「え？」という感じですね．そんなもんなんです．それくらい，あの，みんなは今しか見えてない．体操をやっている人間でさえそういう感じ．

そして，次の言葉も俊子氏の競技人生を表す重要な表現と思われる．それは，“最後までアスリートであってほしい”という願いである．

最後までアスリートであってほしいです．本当の意味のスポーツマンであってほしいと思います．メディアや，それから企業に取り込まれないで，ちゃんと自分に誇りを持っていける人になってほしい．

また，大切なことはプロセスである，という俊子氏の考えを次の発言でも確認することができる．

白井くんたちが紫綬褒章もらいました．けれども，これから彼たちがどういう生き方をするか，それが問われると思うんです．薬物だとかいろんな事件事故が多過ぎますよね．そんな中に必ず入りませんとは言えないですよね，人間どう変わるか分からないから．だから，そのときに負けないでほしい．最後まで自分のプライドを持っていってほしいと思うんですね．主人がその見本になるんだったらば，私は，あの，こういう人間もいますっていうこと，伝えたいと思います．それは，日体大生に伝えてほしいです．体操がどうしてみんなにこう浸透しないかっていったら，そういった人たちを大切にしてなかったから．遠藤さんのことだって，チャス（ベラ・チャスラフスカ；括弧内筆者）がびっくりしたぐらいですよ．あの東北の地震がありましたよねえ．それでねえ，すぐにチェコのほうからチャスが中心になって，20何名だったかな．中学生をチェコで案内して，そしていろんな所を見学させながら，話をしたんですって．そのときに，あの「遠藤幸雄っていうね，とっても素晴らしいスポーツマンがいたのよ．あなたたち知ってる？」って言ったら，みんなぽかーんと口開けたの．チャスはそのときのショックは忘れられないと言っていました．「あの人を忘れないで」って言ったそうです．彼女もね，今年亡くなりましたけどねえ．ちょうどねえ，私2年前かな，チャスがチェコの大使館でこちらへ呼ばれてきたときに，ご一緒したの．大使館へ招待されたので，行ったんですけどね．

俊子氏の後輩に対する願い，それは決して個人的な願いだけではなく，日本人が自国の選手の活躍やその選手がどのようにメダルを獲得したのかというプロセスが大切であるということを他国の選手に教えられた重要な視点ではないだろうか．

そして，最後に次の言葉は体操競技のみならず多くの選手や学生，そして指導者に対して重要な意味を含んでいるように感じられる．

そういった人たちと私はね，ローマオリンピック大会から一緒なの．ローマオリンピック大会，チェコの世界選手権，それから東京オリンピック大会．その大きい大会に，同じ空間で演技をしたの．それだから，東京オリンピック大会の種目別のときに，跳馬で，1000分の1の違いで私は2位から4位になったの．それはチャスが1位で，2位に2人同じ点数のラチニナ選手（当時ソ連）とラドフォラ選手（当時東独）って東独の選手が．記録的には3位なんですけども，私は1，2位，2位に4位なの．それでメダルは取ってないの．けれどもね，その1000分の1の差で4位になりました．私はね，1000分の1の努力不足を私がどこかでしたんじゃないかって思ったの．だから，25歳で東京オリンピック大会を最後に終わりにしましたね．それからの私はね，これから，どれくらい生きるか分からないけども，その間，1000分の1の努力不足を自分で味わうようにしない，という考えをメダル以上に教えてもらったの．だから，もちろん主人の生き方も大切にしましたけども，母が97歳で，88歳から施設に入ってもらわなきゃいけないような，厳しい状態でも，主人の介護とだぶったことも6年ありますけどね，それも全部受け止められたのは，その1000分の1が私の心のくさびになっているから．本当にね，メダル以上に教わりましたね．ある時，小学生の子どもたちに一度東京オリンピック大会の話をしなきゃいけなくって，教科書に載っているから先生話ししてっていうことで，そうしたらね，「僕は1000分の1っていうね，その，努力不足って先生は自分にこうやって指さしたけど，僕だったら人のせいにする．あの審判が悪いとか，あの人がどうのって思ったと思うんだけども，先生すごいね」って言われたの．いや，そうじゃなくって，判定の競技っていうのは，どんな点数であっても

人が見て人が判断してそれでくれた点数だったら，どんな点数であっても自分が受け止めなきゃいけないの．これがスポーツマンだと思っているんですね．だから，「自分に指さすのは自分の1000分の1の努力不足って，もう最初からこうやったの」って言ったの．「そんな考えしない」と小学生の子どもたちは言ったけども，「いやあー，私はね，それを25歳のときに教わったのよ」って．「それからの自分はできるだけ，あの，あれをやれば良かったとか，こうすればというように手を抜くようなことはしないで生きたいんだって思ったんよ」って言ったの．それの積み重ねが今日なんですけどね．やっぱりそういったきっかけがなかったら，私はもっとルーズな人間になっていた，もっと甘い人間になっていたと思うんだけど．

6. まとめ

以上が俊子氏のインタビューをまとめたものである．マクロな視点としては日本が推進している日本版NCAAや2016年6月に報告された『スポーツ未来開拓会議』中間報告書に示されているスポーツの産業化の推進，すなわちスポーツと金の動きである．そして，リオオリンピック大会後に数名の選手がプロ転向を表明した背景に我々は何を見据えるべきなのだろうか．単純なプロ／アマ問題に帰結されるような議論ではなく，より詳細な研究が急がれる．他方，学校教育現場においてオリンピック教育が叫ばれる今日，今回のインタビューにも示されているとおり，グローバル化という言葉に踊らされて，自国のスポーツという文化に目を向けずに他国とのコミュニケーションが可能と言えるのか疑わしい．より積極的に過去のスポーツ選手が如何なる経緯によってメダルを獲得したのか，そして，その後の人生をどのように歩んだのか，資料やインタビューを通して詳細を記述し，そこから抽出される普遍的な課題を見つけ，研究に従事する作業が急務と思われる．今後に課題として中間小括の筆を置く．

（受理日：2017年2月26日）